

第1学年 生活科指導案

日時 平成28年9月5日 2校時
場所 1年教室
指導者

本時の授業テーマ

個々の思いや気づきを比較しながら話し合いをすることを通して、新たな思いを持って次の体験活動につなげることができる授業

1 単元名 いきものとなかよし

2 単元目標

- (1) 身の回りにはいる虫などの生き物に関心をもち、それらを探して捕まえたり、それらの餌やすみかを意識して、大切に飼育したりしようとしている。(生活への関心・意欲・態度)
- (2) 虫などの生き物が育つ場所について考えながら探したり、生き物のために、餌やすみかを工夫して飼育したりして、それを素直に表現している。(活動や体験についての思考・表現)
- (3) 動きや餌といった生き物の特徴や、生き物の育つ場所に気付くとともに、生き物への親しみが増した自分や友達のよさに気付いている。(身近な環境や自分についての気づき)

3 児童の実態 (男子3名 女子7名 計10名)

入学してからこれまで、生活科の学習は楽しんで行うことができている。しかしながら、育ちの中での経験等の違いから、ものに対するかかわり方に個人差が見られる。なかでも、自然とのかかわりについては個人差が大きく、虫などの生き物に関しては、嫌悪感をはっきりと示す児童もいた。5月に行ったアンケートでは、「自然が好き」と答えた児童は2名しかおらず、「地域・自然についてよいと思うことある」と答えた児童は3名であった。そのような実態であっても、福島虫の会会長と学校及びその周辺を散策し、植物の観察をすると、いろいろな自然物を手に取ったり、意欲的に話を聞いたりする姿が見られた。このような姿から、かかわりを多く持てば、親しみを感じることができるようになることも期待できると思われる。

気づきを表現することについては、できるようになってはきているが、教師と対話をしながら進めるなどの支援を要する児童もいる。交流の場も設けるようにはしているが、まだ一方的な発表にとどまっている段階である。

4 単元について

本単元では、身近な生き物を探したり飼ったりして、生息環境や変化、成長、命の大切さに気づき、適切な世話ができるように考え、大切にすることができることをねらいとしている。日常生活において、自然とのかかわりが少なくなっている児童も、身近な活動の場である校庭で虫を見つけることで、今後の積極的なかかわりが期待でき、継続して飼育することで興味・関心を持つことや親しみや責任感、命の尊さを感じさせることもできる題材である。好き嫌いや生き物への接し方に個人差が出る学習でもあるが、それにより、児童同士のかかわり合いも必然的に生まれることが考えられ、気づきの質を高めて一助となるであろう。また、命の尊さを身をもって感じる出来事に直面することも予想され、その尊さを悲しさやつらさから、自分の生き物へのかかわり方を学ぶ機会も得られる単元である。

指導にあたっては、身近に豊かな自然があることよきを感じることができるよう、虫にかかわる機会を多く設けたり、継続的に飼育したりするようにしていきたい。福島虫の会会長の小林先生との自然散策も単元に位置づけ、自然とかわるよきを感じることのできる一助とし、苦手な児童も、「飼ってみよう!」という思いを持つことができるようにしていきたい。また、ただ単に体験活動を繰り返すのではなく、話し合いや交流、発表などの表現活動を適切に位置づけながら体験活動を繰り返し、気づきの質や体験の質が高まっていくようにする。話し合いの際には、気づきの違いを可視化することで、児童に比べさせ、新たな思いをもったり、気づきを高めたりすることができるようにしていく。そのコーディネートの際に、児童の気づきを適切に価値付けしていくことができるよう、目指す児童の姿を明確にした見取りをしていきたい。見取る際には、児童の活動の様子を観察するだけでなく、適切に見取ることができるよう、付箋への記録を行ったり、デジカメを活用したりしていきたい。また、生活科シートや授業の最後に記入する振り返りカードも見取る材料としていきたい。

5 活動を通して期待したい児童の姿

- (1) 虫に繰り返しかかわることにより、親しみをもち、大切にしようすることができる児童。「かかわり力」
- (2) 虫や自分についての気づきや思いをもとに、世話の仕方や虫へのかかわり方を考え、飼育することができる児童。「主体力」
- (3) 虫に繰り返しかかわることで、虫や自分への気づきを深めるとともに、互いの気づきを比較し話し合うことで、新たな思いや気づきを持つことができる児童。「つつこみ力」「主体力」

